

「8050問題」とどう向き合うか！

サードプレイスになる居場所とは！？

経営支援NPOクラブ

川上博史

「8050問題」という社会問題をご存知だろうか。これは50歳代のひきこもりの子の生活を、80歳代の親が支えるという親子関係の深刻な問題である。「ひきこもり」については、以前は、いじめによる不登校が問題視されていたこともあり、若年層のみの問題であるかのように捉えられていた。

近年、ひきこもりから立ち直れなかった人および抱える家族が共に、全国的に高齢化したことで、親が経済的、精神的負担に耐えられなくなり、相談件数が急増したこともあって、内閣府が満40歳から満64歳までの中高年を対象にひきこもり調査を2018年に実施したところ、61.3万人のひきこもりとおもわれる中高年層の存在が確認できた。しかも、その76.6%が男性で、退職や転職をきっかけにひきこもりになるケースが多いという。15歳から34歳までの若者を対象にした、2015年の政府の調査では54.1万人という結果が報告されているので、全国で約115万人がひきこもりの状態であると推計される。

こうした現状を放置すれば、事態は更に深刻化し、孤立死、一家心中、親の死体遺棄、親の年金・生活保護費の不正受給、ニートによる生活保護費の受給増加など、現在でも散発的に起こっている事案が頻繁に起こりうることが想定され、8050問題への迅速な対応が今求められている。

「ひきこもり新聞」編集長の木村ナオヒロ氏は「ひきこもりは誰もがなる可能性があるので、偏見をなくすこと。家族が支えとなるので本人の意見をできるだけ聞き、決して自助にはいけない。更に家族のサポートだけでは限界があるため、社会全体で支えるべき」と主張している。そして、自らがひきこもりであることを自覚した上で、専門家のサポートを受け入れ、無理のない範囲でできるだけ人と会う機会を増やすことが必要だと強調している。

この場合、趣味がひきこもり解消に大切な手段となりうるので、家庭・職場（学校）以外でリラックスできる居心地のいいサードプレイスを如何に確保するかが重要な解決手段となり得る。息抜きができ、同じ趣味や悩みを抱えた人達がつながりの機会を増やせる場所として空き家を活用し、そこで専門家がサポートする仕組みが効果を挙げているという報告がなされている。こうした好事例を水平展開し、行政、民間が協力して、9060問題にならぬよう未然に防止したいものである。